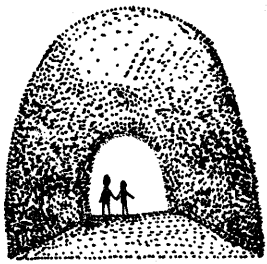

幼少時の談叢

山西貞

はじめに

私は熊本城のすぐ下の京町という所で、ひどい雷雨の日に生まれました。私が雷や地震などに人一倍憶病なのは、生れた途端に大きな雷鳴に驚かされたからだと母にいわれました。父は軍人で第六師団（今の熊本城）に勤務して居りましたので、学令前までここで過ごしました。

幼稚園はその頃あったのかも知れませんが、私は専ら家族の中で過ごしましたので、この頃の幼な友達と云える人は一人も居りません。

家には父母、祖母、叔母そして二才ずつの間隔で長兄、三人の姉、一人の妹がおり、そのほか女中さん一人、父の馬を世話する別当（馬丁）さんが一人住んで居ました。

母は妹が生れた時結核にかかってしまいましたので、妹は叔母に、私は祖母に守られて一緒の部屋に寝ていました。朝、目を醒ますと、時々ミカンが枕元に置いてありました。「これは仏様が下さったのだよ」と祖母が言いながらむいてくれたのを床の中で食べたことを覚えています。私の宗教心はこの様なことから芽生えたように思います。今思えば、仏壇に供えてあった御飯を食べに来た鼠が落して行ったミカンだったのでしょう。

私は無器用で、御飯を食べるのが下手で、そこら中、御飯をこぼしていました。「今に手が生薑の様になってお茶碗が持てなくなって御飯も食べられなくなるよ」と皆に云われていました。「本当かしら」と小さいながら訝ったのですが、或時、本妙寺に連れて行かれ、生薑の様に指先がなくなってモコモコした手を差し出しているお乞食さんが何人も並んでいるのを見たとき「あんな手をした人が居るのだから、やっぱり本当なのだ」と幼い頭で単純な理論をつけ、信じるようになりました。それ以来あまりこぼさなくなりました。当時、熊本には癩の人が多く、加藤清正を祭ってある本妙寺には、清正公様の御利益があると云われ、顔や手足のくずれた癩患者が乞食となって並んでいたのです。

私の四、五才の頃だったと思います。或雨のそぼ降る日のこと、叔母は私に妹と留守番している様にと云い残して買物に出かけました。暫くして私はつまらなくなって、叔母を迎えに行こうと思い立ち、妹に気付かれない様にそっと家を出て、どんどん市場の方に歩いて行きました。途中で帰りがけの叔母に出会った時、一寸振り返ると妹がいつの間にか附いて来ているではありませんか。叔母は怒って妹だけ抱いて足早やに歩いて行ってしまいました。私はおくれて、ぬかるみを裸足になって追いかけ、やっと家に辿りついたと思ったら門は固くとざされていました。力一ぱい開けようとしましたが開きません。云いつけを守らなかった懲に閉め出されたとさとって、私は声を限りの大声で泣いていましたら、やっと祖母が開けに来てくれました。

妹と私はいつも一緒に育てられましたのでよく喧嘩も

したようです。何が原因だったか定かではありませんが妹が竹の棒を持って私を追い廻し、家の者達がやんやと囃す中を一生懸命逃げ廻った覚えがあります。一緒に小学校に通うようになってからは、きょうだい中で一番仲よしになりました。小学校の先生から「二人はいつも一緒に戯れ合っていて蝶々の様だ」とよく云われました。女学生になって妹は東京府立第三高女（現、駒場高校）、私は第六高女（現、三田高校）でしたが、行きも帰りも、家から渋谷の間は毎日待ち合せて一緒に通いました。そんな妹が四年生の時、結核になり他界してしまいました。その時の悲しみは私の勉学にひどく影響しました。多摩墓地に埋葬の時、私は真けんに考えました。「死んだら同じお墓に入ろう。それには結婚しないことだ」と。

スリルと恐怖

父の転任で私は小学校に入る直前に東京に来ました。家は三軒茶屋でしたが、父の考えで、評判のよかった目黒町大橋にある菅刈小学校に入学しました。三軒茶屋から大橋まで玉川電車（当時路面電車）、帰りは大てい すぐ上の姉と歩いて通いました。私は玉川電車が向うから走って来るのを見ると「見ててごらん」と云って突然走り出して近づく電車の前を横切って見せるのが得意でした。姉はその度にヒヤッとさせられたと今でもよく話題にします。今思えば全く危いことをしたものだとゾッとしますが、その時はスリルがありました。ところが二年生の夏のことです。私は後から来たオートバイにはねられ、しばし気絶しました。幸い家のとりつけの魚屋さんの店先だったので、魚屋さんは私を抱いて家まで運んでくれました。オートバイの青年も家まで来てくれました。玄関に入った時は少しも痛みを感じませんでした。叱られると思ったので「何でもない」と頑張りましたが、「兎に角、病院で見て貰わなければ」と無理矢理に赤十字病院に連れて行かれました。診察の結果左肩の鎖骨が折れていることが判り、治療室に入れられました。

その治療処置の激烈な痛みは言語に絶しました。「治療の間中、病院が倒れる様な大声で泣いた。」と後々まで語り草になりました。不幸中の幸とでも申しましょうか、オートバイの練習中だったのだそうで、ずい分手厚い償いをして頂きました。全快祝いには御殿の様な立派な西洋館のお家で、すばらしい御馳走を頂きました。質素な軍人の家庭で育った私は夢心地でした。私の幼少時の色鮮やかな思い出の一こまです。

オートバイに轢かれた後、暫くは極度に憶病になりました。自転車が来るのを見ても、サッと電信柱（その頃は道の両側に沢山立って居ました）の所に走ってゆき、自転車が通り過ぎるまで電柱にかじりついて動きませんでした。それを見て姉達は「大丈夫よ、大丈夫よ」と云って笑いました。

大正十一年九月一日、小学校一年の夏でした。関東大地震が突然東京を襲いました。母を囲んで皆でお昼御飯を食べていた所でした。震度7だったと言われています。から、それは凄じいものでした。気がつくと私は一人、庭に飛び出していました。母が姉や妹を両手でかばいながら部屋の中から私を呼びました。私は縁側からはい上ろうとしますが、ひどく揺れてなかなか上れません。必死の努力でよじ上れた時は母にしがみついてワンワン泣きました。この時のショックは非常に大きく、恐怖は私の体全体にきざみ込まれてしまいました。寝ていても僅かな地震で反射的に飛び起きてしまいます。後年女学校の教壇に立つようになっても地震は一番の苦手でした。生徒達に口では「大丈夫です。落ち着いて。」などと云いながら顔から血がひいてゆくのが自分でも判りました。「先生、あの時は真蒼でしたよ。」と後で生徒から笑われる事もあって全く恥かしい思いをしました。小さい時受けた強い恐怖は理性ではどうしようもない程、根強く残るようです。

馬と鶏

私は生来、動物が好きです。

熊本に居た頃、私がニンジンを馬小屋に持って行くと馬はやさしい眼をして鼻を鳴らしました。馬丁さんに抱かれて馬にニンジンを食べさせるのがこの頃の楽しみでした。東京に移った時はもう家の馬は居ませんでした。菅刈小学校に通う道すがら私はよく荷馬車を曳いた馬に出会いました。時々大きな荷物を山の様に積んでいる荷馬車がありました。はずみをつけて一気に坂を駈け登ろうとする馬が途中で力尽きて、ひと休みすると車はズルズルと下に戻ってしまい、馬はハァハァ喘いでいました。馬追いの人が罵声をあびせながら馬のお尻を鞭でビシビシたたいています。その度に馬は又馳け登ります。そんなことをくりかえしている中に馬の黒い瞳から涙が流れているのを見ました。熊本では馬の笑う顔を見たことがありますが、馬が泣くことをこの時はじめて知りました。長い睫毛の黒い大きな目から涙を流している馬の顔は、何故か今でも時々思いだされる幼い日の記憶です。私は白馬物語とか、子供向け番組でも馬の出て来るテレビを今でもよく見ます。馬は本当に可愛い動物だと思います。

小学校二、三年頃、家に鶏を五、六羽飼っておりました。生みたての卵を母が必要としたからです。その中に一羽の雄どりが居ました。王冠の様な立派な鶏冠で、赤い大きなネクタイをつけている様な大変風格のある白色レグホンでした。この鶏は、特に私に馴れていました。私が膝の上に抱いて胸を撫でてやると眼を閉じてじっとしていました。毎朝私が鶏小屋を開けてやると飛び降りて来て、一声コケコッコーと挨拶をしてから舞扇の様に片方の翼をパッと下に向け広げます。そして私のまわりをぐるっと廻って地面に円を画きました。いつも世話をしていた私にだけやって見せる挨拶でした。あんな小さな頭で、ちゃんと考えているのです。私は自分の心がこの鶏に通じる様な気がして、悲しい事があった時などよくこの鶏と遊んでいました。私は今でも神社の境内などで放し飼いの鶏を見ると「とうー、とと」と呼んで見ます。でもあのレグホンと違って、只怪訝な顔をして頸を

傾けるだけで寄って来てくれません。もう少し暇になったらチャボ位飼って見たいと思っています。

父と母

父は厳格な軍人で、兄にはスパルタ教育で極めて厳しかったのですが、私はあまり叱られた覚えがありません。けれどやはり威厳があって子供の私にはこわい存在でした。そんな父が東京に転任してまもなく、母が杏雲堂病院に入院した日、いつもより早目に帰って来ました。そして大きな鉄鍋と牛肉や野菜をひろげてスキ焼の用意を始めました。母を病院に見送って、隙間風が吹いている様な冷たい淋しい気持になっていた私は、皆でスキヤキを囲んでいる中に、身も心も温められたことを思い出します。父は表面は厳しいけれど、とても優しい人なのだと子供心にも思ったのでした。

母は数ケ月の入院の後、家に帰って来ました。母は人一倍優しい人でした。体が弱かったのに献身的に子供達を育ててくれました。母は時々渋谷の方まで買い物に出かけていましたので、私は小学校の帰り道、一緒になることがありました。そんな時「お腹が空いた」と申しますと、母は人通りの少ない木蔭に入って、風呂敷からお菓子やバナナなど出してくれました。本当に甘い母親でした。母から叱られた記憶も殆どありませんが、母のよく言っていた「軍人の妻は質素にしなければならない。下の人達を大切にしなければならない。」という言葉はよく覚えています。母は御用ききの人達にも大変親切でした。私は小さい時から作文はあまり得意ではありませんでしたが、母のことをテーマにすると、とび切りよい点が頂けました。その作文のむすびには「私は母が大好きだ、母は子供を人一倍溺愛する。決して賢母ではない。でも私の母は日本一の母だと思う。」というような事を書きました。母は私が女高師を卒業した年の冬に結核が再発して亡くなりました。母の死後、母の日記の中に一ヶ所だけ墨筆で黒々と書かれている事がありました。私の就職が地方でなく、東京のフレンド女学校に決ったとい

うことでした。当時は文部省の命令でどこにでも行かなければならない様な時代でしたから母は内心随分心配していたのでしょう。

小学生の私

最後に私の小学生生活を思い出して見ます。一年生から三年生まで男女組でした。一年の終りの学芸会で桃太郎になりました。緋色の袴をつけて日の丸のついた長い旗を持って、「お腰に附けたキビ団子、一つ私に下さいな。」と手を出すお猿さんや犬さんに紛した男の子にキビダンゴをあげた事など楽しく思い出されます。男女組だったのに何故私が桃太郎になったのだろうと、今思うと不思議です。

四年生から、家が上目黒に移り、小学校も烏森小学校に変り、女組になり、段々おとなしくなりました。

昔の小学校は授業時間中勉強するだけで充分だったようです。家に帰るとすぐ近くの練兵場に妹達と飛び出して行って走り廻ったりボール投げしたりして遊びまわりました。練兵場は大変広くて起伏や崖などもあり遊ぶのには絶好の場所でした。疲れると木蔭で兵隊さんの吹くラッパを聞いたりで、夕食までの時間は忽ち過ぎて行きました。夕日の沈みかけた空は大変綺麗でした。「夕焼け小焼けで日が暮れる」とか「烏がなくから帰ろ」など歌いながら夕飯を楽しみに帰ったものです。日曜はきょうだいと多摩川遊園地によく出かけました。私はブランコをこぐのが得意で妹を乗せて、水平近くまで漕いで、妹を酔わせ兄からひどく叱られたことを思い出します。

小学校で苦手なのはお裁縫でした。五年生の時は浴衣も縫いましたが、提出したら先生が「これはお角力さんの浴衣のようですね」と云われ、苦労して縫った脇縫を全部ほどかされました。五センチ位の縫代にすべき所を一センチにしていたのでした。情なかった思い出です。

夏休みの日記帳の宿題でも苦労しました。二、三日しかないという時から書き始めるので、姉達を総動員してぎりぎりに書き上げるという始末でした。「なぜちゃん

と毎日書いておかなかったの」と叱られるのですが、毎年、同じことを繰り返していました。泥縄は今でもなおらない困った習性です。

結び

三つ子の魂百までとよく云われますが、小さい時、近づく電車の前を走って横切った時の気持は、私が女学校の先生をやめて北大に進んだ時とか、外国留学や海外に仕事に出かける時などに持つ気持と通じる所があるように思います。

私は小さい時歌ったうたの中で、「泣きの涙の青い鳥、お前の生れは何処の国、オランダ、スペイン、イタリーか、南の南の暑い国」というのがふっと出て来ることがあります。私は南の国が好きで、今までにスリランカに八回、インドネシア、シンガポールなどに数回出かけています。これは、幼い日を思い出させるこの歌の故でしょうか、それとも私が日本の南、熊本で暑い夏の日に生れた故でしょうか。

今年もまた、暮からお正月まで、スリランカに、一月半ばから四月までインドネシヤに、渡り鳥のように南の国に出かけます。

〔著者紹介〕 やまにし・てい。一九一六年七月十日生れ。東京女高師を卒業後、普連土女学校教師を経て、一九四三年、北海道大学農学部に進む。一九八二年まで、お茶の水女子大学教官を勤める。緑茶・紅茶のフレイバー（香り）研究の第一人者として世界を舞台に活躍。「ティ（貞）・山西」と異名をとり、フレイバーの絶妙な分析は、鼻リシスともいわれる。退官記念の御本に『香りへの道』がある。